京都市長選挙とゴミ問題

課題は市民とのパートナーシップ

須 原 克 太

本年２月６日に行われた京都市長選挙は、現職の桝本頼兼市長と、共産党などが支持する井上吉郎氏との、事実上の一騎打ちで行われた。結果は桝本氏が28万5000票、井上氏が21万票と、７万票の大差をつけ圧勝した。前回は同じ顔触れで11行政区のうち、左京区、北区、右京区の３行政区で井上氏がリードしたが、今回は全行政区で桝本氏が勝利をするという結果になった。

このことは、桝本市政の４年間が率直に市民に評価された結果であるといえるであろう。本稿では、今回の市長選挙のなかで焦点となった政策論争のうち、廃棄物行政、いわゆる「ゴミ問題」を取り上げてみたい。

まず、市民がゴミ問題に対し、どのような意識をもっているのかについて、我われ自治労京都市職員労働組合が行った市民アンケートを参照しながら、明らかにしたい。また、井上陣営がどういった問題を指摘したのか、それに対し京都市政はどういった現状であるのかを示していきたい。

そして、地方自治の政策遂行と、市民に対する情報公開と、パートナーシップのあり方の方向性の問題提起が、若干でも明らかになれば幸いである。

市民に関心が高いゴミ問題

1999年11月に自治労京都市職は、京都市政に関する市民アンケート調査を行った。そのうち、設問の「Ｑ５　今後、京都市政はどの分野を充実すべきだと思われますか」の部分と、自由記入欄の、アンケート結果をもとに、ゴミ問題に対する市民の意識を分析していきたい。

まず、アンケートの集計結果は、次ページに表として示した。そのなかで、「ごみ対策」については、全体では３位であり、充実すべき課題としての関心が高いという結果である。

アンケートのなかの「自由記入欄」で、ゴミ問題に関する記述の一部を抜粋してあげてみる。

・京都市は、ごみ対策が全然進んでいないので、分別収集ができるようにしてほしい。環境会議も京都で行われたことがあるのに、これではがっかりだ。（女性、20歳代、学生）
・ゴミは分別して出すようにするべきだと思う。今のままではゴミの量も全く減らないだろう。（女性、10歳代、左京区、学生）
・ゴミ収集（分別）に対する取り組みが、他の市町村に比べ遅れているように思われる。（女性、20歳代、伏見区）
・環境対策として、ゴミ分類を今以上に細分す

アンケート調査結果

Ｑ５　今後京都市政はどの分野を充実すべきだと思われますか

（この設問は、３項目選択であるので、合計は300%になる）

男　性

１位	道路・交通網の整備	46.6%
２位	高齢者福祉の充実	31.9%
３位	環境対策	30.5%
４位	ごみ対策	28.9%
５位	産業の振興	24.3%
６位	保健医療の充実	23.8%
７位	住環境の整備	18.4%
８位	観光の振興	14.9%

女　性

高齢者福祉の充実	46.3%
ごみ対策	36.2%
保健医療の充実	33.7%
環境対策	27.2%
道路・交通網の整備	26.7%
教育の充実	17.9%
障害者福祉の充実	16.9%
住環境の整備	15.2%

全　体

１位	道路・交通網の整備	40.3%
２位	高齢者福祉の充実	36.4%
３位	ごみ対策	31.2%
４位	環境対策	29.4%
５位	保健医療の充実	26.9%
６位	産業の振興	21.2%
７位	住環境の整備	17.3%
８位	観光の振興	14.9%
９位	教育の充実	13.9%
10位	障害者福祉の充実	11.5%

べきだ。焼却して野山に捨てず、リサイクルすること。（男性、40歳代、伏見区）

・「ごみ」についてなんですが、もっと分別し、もっとゴミを減らしていくようにしていただきたい。どんな立派な埋め立て地をつくっても、すぐに一杯になってしまう気がします。（女性、20歳代、南区）

・ゴミ対策が非常に遅れていると思う。燃えるゴミ、燃えないゴミ、空きビン色別回収など早急に細分別ゴミ回収をしてほしい。ダイオキシン問題が起こってから、対策を立てるのでなく、歴史ある都市として他の都市の手本となるべき対策を立ててほしい。早くしないと意味がない。(女性、30歳代、西京区、主婦）

など、分別に関する記載が42件あった。

・ゴミのポイ捨て、大型ゴミの不法投棄等に厳しい罰則を設けて、シンガポールの様な美しい都市にして欲しい。（男性、50歳代、下京区）

・京都はとってもゴミの多い町です。タバコの吸い殻など道路に一杯です。罰金を取ってでもきれいにしてほしい。それに緑が少ない、最近特に（女性、40歳代、右京区、自営業・自由業）

・タバコの投げすてなど何とか対処できないのか!?（男性､30歳代､北区、会社員・公務員）
・タバコ、ゴミ等のポイ捨てに罰則の条例を（男性、50歳代、上京区）
・地域を巻き込んでの町並美化キャンペーンが必要。電柱、並木、フェンス、電話ボックスなど、公共（半公共）物に貼紙、カンバンが所かまわず貼ってある。市、地域、ＮＴＴ、関電などと協力体制を取り、一掃キャンペーンが必要。また、条例化も必要！（男性、50歳代、南区）
・「京都を日本一美しい街に」をスローガンに行政を考えて欲しい。（男性、30歳代、西京区）

など、まち美化に関する記載が18件である。

・大型ゴミについてもっと処理しやすい改善に努めてほしい。（男性、40歳代、北区）
・不法投棄や不法駐車を厳しく取締まっていただきたい。（男性、30歳代、右京区）
・環境、ダイオキシン対策として取り組んでいただきたいこと。生ゴミ処理対策の推進と肥料ゴミの提供対策、推進。生ゴミ処理機の家庭設置対策及び、ゴミの出量抑制と肥料ゴミの家庭利用及び家庭使用不可の場合の週回収制度推進及び肥料活用法（男性、70歳代、西京区、無職）
・ゴミ対策が都市の割に遅れている。もっと生産者と消費者両方に責任感を持たせるべきである。市政を活性化させるには、今後、増加が確実なお年寄りと、多くの大学をかかえる利点を生かして、学生の地方自治への積極的な参加をうながすべきである。（男性、20歳代、上京区、学生）
・ごみ減量対策として、肉・魚のパック販売をやめ、ビニール販売にしていく様にしていってほしい。ドイツなどの外国の様に徹底的にごみ減量対策に取り組んでほしいです。（女性、20歳代、南区）
・ゴミ再利用効率ｕｐ、ゴミ焼却炉＋発電設備で有効利用。（男性、50歳代、南区）

など、ゴミ問題全般に関する記載が31件あった。

上記のアンケート自由記入欄では、大別して、「ごみの分別」「まち美化」について多くの意見が出されている。とくに、極めて多く出されている「ごみの分別」については、３種混合収集（缶・ビン・ペットボトル）について、混合収集の結果、再資源化がなされていないという誤解にもとづく意見が多く、分別収集とリサイクルの現状の正確な市民の理解を得る必要がある。

市長選挙での争点

井上陣営は、「ゴミ減量・循環型社会へ　――時代遅れのゴミ行政を抜本的に転換」として、「ＣＯＰ３開催都市でありながら、現市政は、燃えるゴミも燃えないゴミも一緒に燃やすゴミ行政に何の反省もありません。徹底したゴミの減量化と分別・リサイクルを進め、環境に優しい町作りへ転換します」と主張した。特に、缶・ビン・ペットボトルの混合収集について、混合収集をすることによりあたかも再資源化＝リサイクルされていないかの主張が展開された。

京都市のゴミ(廃棄物)行政の現状

京都市は、新京都市ごみ減量・リサイクル行動計画「京・めぐるアクションプラン」を1999年８月に策定し、「リサイクルをすすめ、ごみを出さない循環型社会、ポスト消費社会『環境共生型都市・京都』」をめざしている。具体的目標として、ごみの減量目標を1997年度レベルから2010年度に15%削減（家庭系で10%、事業系で20%）を目標に、ごみ処理料を77万7790トンから66万1000トンに減らす計画である。

政令指定都市における缶・ビン・ペットボトルの収集方法

都市名	混合収集	缶	びん	ペットボトル	備考
京都市	◎	○	○	○	
		（三種混合収集）			
札幌市	◎	○	○	○	
		（三種混合収集）			
仙台市	◎	○	○	○	
		（三種混合収集）			
千葉市	×	○	○	○	ペットボトル拠点回収
		（コンテナ）	（コンテナ3種）	（拠点回収）	
川崎市	○	○	○	△	＊1　ペットボトルを実施している区では，缶・ペット混合袋出し
		＊1	（コンテナ）	（3/7区で収集）	
横浜市	◎	○	○	△	＊2　ペットボトルを実施している区では，缶・びん・ペット混合袋出し
		（混合収集＊2）		（3/18区で収集）	
名古屋市	×	○	○	○	ペットボトル拠点回収
		（コンテナ，袋）	（コンテナ）	（拠点回収）	
大阪市	◎	○	○	○	
		（三種混合収集）			
神戸市	○	○	△	○	モデル地区について，9行政区各1地区モデル（約1000世帯）計13,000世帯
		（混合収集）	（モデル地区）	（混合収集）	
広島市	○	○	○	△	＊3　缶・びんの他，紙・布も混合排出
		（混合収集＊3）		（1/8区で収集）	
北九州市	◎	○	○	○	
		（三種混合収集）			
福岡市	○	○	○	○	モデル地区について，7行政区各1地区モデル（約1000世帯）計8,200世帯
		不燃ごみ	（混合収集モデル地区）		

◎　三種混合収集　　○　二種混合収集

1．ゴミの分別について

①分別について

現在、３種混合袋出収集であるが、南部資源リサイクルセンターや横大路学園において、アルミ缶・スチール缶・茶色ビン・無色ビン・その他のビン・ペットボトルに選別処理し、すべて資源として活用している。その際に、ビンが割れていても、リサイクルには問題がない。

②３種混合収集について

缶・ビン・ペットボトルを品目別に収集するのは大都市部においては困難な問題である。収集するためのスペースの確保、人員・車両の整備コストが膨大になる。現に、政令指定都市において、缶・ビン・ペットボトルの完全な分別収集を行っているところは少ない。（上記表参照）

また、３種品目別収集をおこなったとしても、ハンガーやフライパン等、違うものが入っていることがあるので、手作業による分別は必要である。したがって、３種混合収集をおこなったうえで、選別処理を行う方法は、現段階では極めて妥当な方法である。

2．リサイクルの先進的な取り組について

①廃食用油（使用済みテンプラ油）の回収、リサイクルについて

廃食用油（使用済みテンプラ油）の回収は、1997年から全国に先駆けて回収をおこない、再生されたバイオ・ディーゼル燃料を使用している。 回収は、1999年12月現在、拠点数は502カ所であり、回収量は約10万リットルである。2001年には全市で、回収し47万リットルの目標である。

活用方法としては、ゴミ収集車全車両(約220台）の燃料として使っている。また、試験的に市バス（２台）にも導入し、今後、利用拡大を検討している。

廃食用油（使用済みテンプラ油）の燃料は、

窒素酸化物の大幅な軽減、二酸化炭素の軽減に役立ち、環境にやさしい燃料である。

廃食用油について、慣習から再生、再生品の利用にいたるまでのリサイクルの輪を完結させているのは京都市だけである。

②バイオガス化技術実証研究プラントについて

生ごみのリサイクルとして、バイオガスの研究がおこなわれている。生ごみをバイオガス化するというもので、完成すれば、バイオガスが発電や燃料に使用されるとともに、発酵後のものから堆肥が得られるというものである。

3. ダイオキシン対策について

京都市のクリーンセンターは、1999年度中にダイオキシン対策が完了し、環境庁の2002年基準を満たすこととなる。

京都市全体としては、７月に策定した「京都市ダイオキシン類対策推進計画」に基づき、対策がおこなわれている。

4. まち美化推進の取組について

「美化推進条例」（1997年策定）にもとづき、「京都市美化推進協会」を設立し、ボランティア団体と協力し美化活動に取り組んでいる。また「まち美化住民協定」で門掃きや町内清掃を推進している。

また、個人ボランティアの育成と観光客に対する啓発を進めるため、「友・遊美化パスポート事業」を推進している。

ごみのポイ捨てについては、監視パトロールの強化を行うとともに、不法投棄防止のため、職員によるクリーンアップチームを結成している。

ゴミ行政をめぐる市民とのパートナーシップの課題

このように、京都市のゴミ行政はかなり先進的な取り組みがなされているのに、「市民アンケート」では分別がなされていないなどの批判が多く出されている。つまり、家庭から出される廃棄物＝ゴミの分別収集について、京都市が現に行っている施策と市民の意識の間に大きな乖離があるといういう結果であったた。

市民アンケートの自由記入欄に書かれている分別収集に関する記載についても、大変な誤解があるようだ。缶・ビン・ペットボトルの混合収集をすることにより、ほとんどが焼却に回され、リサイクルされないとの認識があるようだ。

事実は、資源リサイクルセンターで再資源化が図られ、ほぼ全てがリサイクルされている。したがって混合収集することがリサイクルの妨げになっている事実はないのである。

さらに、廃食用油のリサイクルについては、規模も大きく、何よりもリサイクルされた燃料をパッカー車（ゴミ収集車）で活用する等、リサイクルの輪が完成しているのは、大都市では京都市だけである。

では、この事実と市民の意識との乖離は何が原因であろうか。まず、分別収集に対する大きな誤解があるようだ。京都市職として７年前にも市政アンケートを行ったことがあるが、その時によせられた市民の声にも「分別収集」に関するものがあった。「可燃（燃える）ゴミ」と「不燃（燃えない）ゴミ」の分別を京都市はしていないという指摘である。リサイクルする品種を定めた「容器包装リサイクル法」に基づき分別収集している現在と違い、分別収集している市町村の多くは「可燃（燃える）ゴミ」と「不燃（燃えない）ゴミ」との分別収集であった。

リサイクルするにあたっては、ビンを例にとってみても、ガラスの色や形状によって、リサイクルする方法も違うし、リサイクルに適しないものもある。したがって機械的にするか手でするかは別にして、細かく確実に選別した上でないとリサイクルできないのである。

「可燃ゴミ」「不燃ゴミ」の分別の場合、「可

燃ゴミ」は当然、焼却に回される。「不燃ゴミ」については、ビン・金属類を始めさまざまな種類の不燃物が混合して出されており、選別は事実上不可能であり、ほとんどの場合、リサイクルに回されるのではなく、そのまま最終処分地である埋め立て地に埋め立てられるのである。

当時、京都市は「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」の分別はしておらず、清掃工場（現クリーンセンター）において焼却していた。これは「燃えないゴミ」として集められたものでも燃やすことによって確実に容積がへり、埋め立て量が少なくなることが大きな理由である。一方で、市町村が「可燃ゴミ」「不燃ゴミ」の分別をしている理由の大きな割合を占めるのが、「清掃工場」の焼却能力不足によるところが多い。リサイクルする為ではなく、自治体の都合によって分別をしているのである。したがってゴミ減量・リサイクルの観点からみて、「可燃ゴミ」「不燃ゴミ」の分別は進んだ状態であるとは決していえない。

現在の京都市の分別の収集方法である缶・ビン・ペットボトルの混合収集に対する誤解として、混合していることによりリサイクルがされていないという誤解が生じている。

現実は、缶・ビン・ペットボトルの選別はもとよりビンの色の違いによる選別も資源リサイクルセンターにおいて機械的に行い、リサイクルされるのが現状である。したがって、こういった誤解を招かないために、いかに市民に分別と再資源化の事実を正確に伝える方法が求められる。

ここで、京都市が標榜している「市民と行政のパートナーシップ」の本当のあり方が問われるのである。自治体と市民とのギャップが生じないようにするために、さまざまな方法について、自治体はもとより、自治体の労働組合の取り組みとして、真剣に検討が求められる。

（すはら　かつた・自治労京都市職員労働組合副委員長）